子どもの日本語教育研究会 第９回大会

2024年 3月 9日（土）

プロジェクトＡ
ワークショップ
「実践を伝える・聴く・語り合う」

散在地域の実践例からin北陸　ーひとつの現場からわたしたちの現場へー

2023/10/21

報告会

NPO法人アレッセ高岡共催

子どもの日本語教育研究会　ワークショップ2023

ALECE TAKAOKA

シリーズ：実践を伝える・聴く・語り合う

散在地域の実践例からin北陸
ーひとつの現場からわたしたちの現場へー

子どもの日本語教育研究会では、多様な言語文化背景をもつ子どもたちを対象とする日本語教育・学校教育・地域支援の実践と研究の相互交流を図り、その現場の成長と関連領域の研究の発展を促進することを目指しています。

本ワークショップでは、実践から学び、新たな実践・研究につなげていくために、実践者が何をどのように伝えようとしたのか、それは多様な立場の受け手にどう伝わっているのか、実践者・受け手はそれぞれどのような視点をもってその実践を見ているのかを対話の中で再確認することにより、その「実践の意味」をより深く考えていきたいと思います。

今回は、散在地域の小学校における外国人児童への実践をお聞きし、実践者と皆さんがディスカッションをしながら、ともにこの実践の意味を探り、自分の現場へつなげていくことを目指します。外国人児童生徒等への指導・支援に関わっている皆様のご参加をお待ちしております。

■日　時：2023年10月21日(土) 13:00-16:30
■会　場：高岡市男女平等推進センター会議室(富山県)
■参加費：500円(資料・会場代含む)
■定　員：30名
※午前中は同会場でNPO法人アレッセ高岡によるイベントがあります。
参加費は無料です。(詳細は裏面をご覧ください)

プログラム
13:00～13:10 開会・趣旨説明
13:10～13:25 アイスブレイキング
13:25～14:20 実践報告
「図画工作科と算数科の横断型学習のための日本語指導教材の作成 ―活動を通した教科学習の促進を目指して―」
阿部朱理・中川佑紀(金沢大学附属小学校)・深澤のぞみ(金沢子どもスタディサポート)
14:20～14:30 休憩
14:30～15:15 グループディスカッション
15:15～16:00 実践者との質疑とディスカッション
16:00～16:20 振り返り(グループで)
16:20～16:30 閉会

お申込み
コクチーズより
お申込みください
https://onl.bz/DJ6qGST
申し込みは午後と午後で異なるのでご注意ください。
● お申込受付：
9月11日(月)～10月14日(土)

★お話し・★ディスカッションを行うため、下記URL(QR)の実践報告を事前にお読みのうえご参加ください。
https://onl.tw/dY1uQf

お問い合わせ
子どもの日本語教育研究会事務局
konichiken_jimukyoku@gmail.com(担当：村澤)

菅原雅枝（愛知教育大学）
深澤のぞみ（金沢子どもスタディサポート）
青木由香（NPO法人アレッセ高岡）
村澤慶昭（武蔵野大学）
髙柳なな枝（地球っ子クラブ2000）
今澤悌（甲府市立大国小学校）

ワークショップ開催の経緯：プロジェクトAの活動

テーマ：実践から学ぶ
⇒「実践から学ぶ」とは？「実践から学ぶ」には？

実践をめぐるチーム内のワークショップから

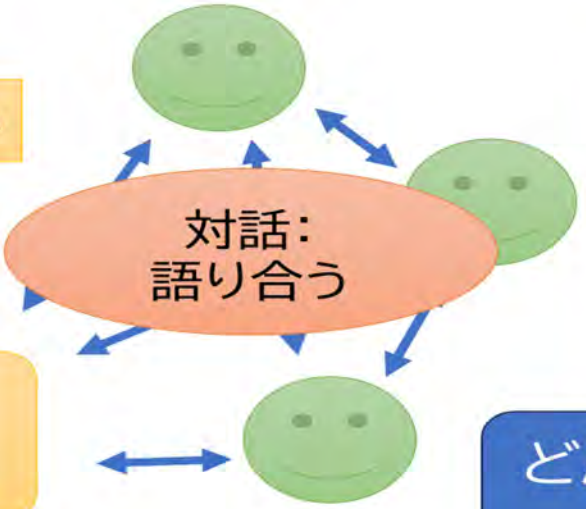
実践者

何を、なぜ伝えたいのか

実践報告

実践者の意図
伝わる？伝わらない？

その要因は何か



読み手・聞き手

実践をどう見るか

読み手・聞き手の
立場・関心による違い

どんな実践からも学ぶには？
「受け手」の役割は？

対話による学び
（新たな視点の獲得・理解の深まり）

プロジェクト内の議論から「実践」へ

アレッセ高岡さんとの共同開催

- 散在地域で実践を共有しよう
- 散在地域だからつながっていこう
- 散在地域だからこそ！を発信しよう

【ワークショップ概要】

•開催日時：2023年10月21日（土）　13：00～16：30

•場所：高岡市男女平等推進センター会議室（富山県高岡市）

•共催：アレッセ高岡

•参加者：28名（教員、大学生、支援者、その他）

本報告会の趣旨と展開

1. 実施報告：菅原雅枝
2. ワークショップを通して学んだこと
   - 語り合いから得られること
     登壇者から：深澤のぞみ
     企画者から：青木由香
   - 語り合うために
     どう語るか：村澤慶昭
     どう聴くか：髙柳なな枝
1. まとめ：今澤悌

やってみませんか？
小さな「語り合う会」

プログラム

1. 趣旨説明
2. 実践報告「図画工作科と算数科の横断型学習のための日本語指導教材の作成ー活動を通した教科学習の促進を目指してー」
3. 第1回グループディスカッション
   ：確認すべきことは何？

⇒　事実確認の質問タイム

4．第2回グループディスカッション
   ：深めたいことは何？

⇒　全体協議

5．第3回グループディスカッション
   ：得られたことは何？

6．まとめ

実践報告の概要

実践報告の資料はこちらから
https://www.kodomo-no-nihongo.com/kodomo/archives/102

実践の場：金沢大学附属小学校日本語適応教室「さくら」
対象児童：4年生男児（母語：ペルシア語）←算数に苦手意識
実践者の問題意識：個別指導の後、一斉指導の学習に移行
　　⇒　初期日本語指導を教科の理解につなげることが困難
実践の目標：図画工作科の指導を起点とし、教科の語彙・表現との関連を意識的にもたせ、さらに教科の理解そのものを促進させる。
成果：①　図形の名前など、算数でも使われる語彙が多く、児童は自分で図形を描きながら言葉を覚えた。
　　②　その活動を想起させながら、算数の学習を導入し、図工で学んだ知識を算数でも活用できた。

ディスカッション
ーひとつの現場からわたしたちの現場へー

「さくら」の実践を基に、どう「つながる／つなげるか（人／教科）」について議論
⇒　自分の立場、状況だったら何ができるか

「さくら」の実践を「特別なもの」とするところから：複数児童が対象なら？定員いっぱいになったら？
⇒　支援にあたる当事者として「何ができるか」を中心に議論

さくらの実践から「学校の中だけで終わらせてはいけない」ことを共有　⇒　管理職をどう巻き込むか、情報をどうつなげ・広げていくか（＝外部とのつながりの重要性）について議論

「さくら」の実践から「教育とは」などの話題へ：「学んだ」とは？　評価とは？
⇒　子どもに対するときの態度について議論

「さくら」の実践の場の特殊性を認識したうえで：参加者の学校や地域でどんな支援が可能か議論
⇒　近隣地域の実践であることの意味

報告することで得られること：登壇者から

◻子日研での発表から報告会へ：

- いつもの研究発表は、「発表して終わり」となるのが普通
- 「発表しっぱなし」で満足せずに、よく考えるという経験に
  - ✓想定問答したうえで、プレゼンを再構築した。客観的に実践を見つめ直す機会になった。
  - ✓学校教育と日本語教育の共通点や相違点をすり合わせて、私たちなりの答えを見つけ出し、報告会にのぞむことができた。

◻報告会での報告：

- 「自分たちの現場では同じようなことをするのは難しい」と決めつけてしまいがち
  - ✓ 自分の現場との異なりの詳細を確認した上で、自分の関わっている現実と発表の内容とを結びつけようとする、丁寧な運営の重要性

報告することで得られること：登壇者から

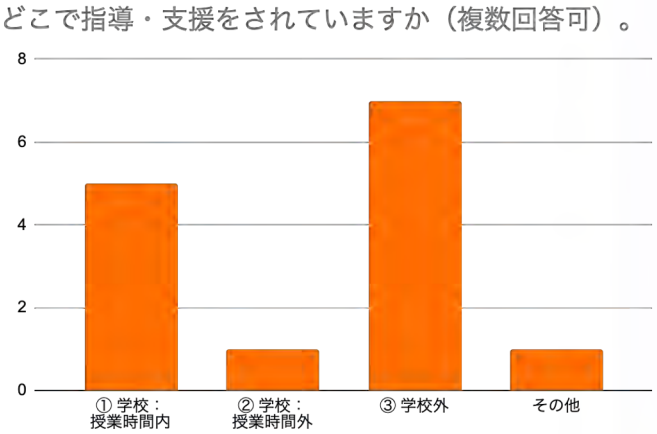
◻ 質疑応答（対話）からの学びは：

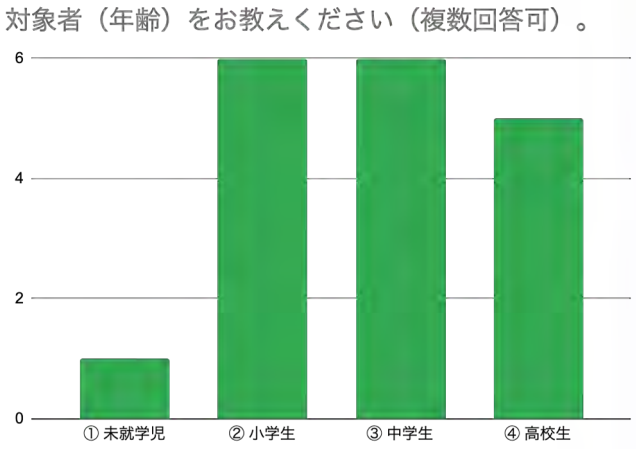
- 実践の場（設立の経緯、授業のシステム、環境の特異性など）についての事実確認の上での質疑応答
  - ✓ 実践内容を深めた有意義な質疑応答の時間となる
  - ✓ 参加者の立場や環境におきかえて、自分たちの実践を多角的に考える機会に
  - ✓ 質問に向き合うことで、自分たちの実践の根底にある理念を見つめ直すことが可能に

◻ 報告者としての経験全体：

- 自分の現場での経験を文字化して意識することが、実践報告に結びつく
- さらにそれを報告し議論することが、さまざまな現場や現象を知ることに
  - ✓ 報告者にとってはもちろん、報告を聞いて議論に参加した人にとっても
  - ✓ ただ報告された内容を消費するのではなく、真の実践知となり得る

語り合うことで得られること：企画者から

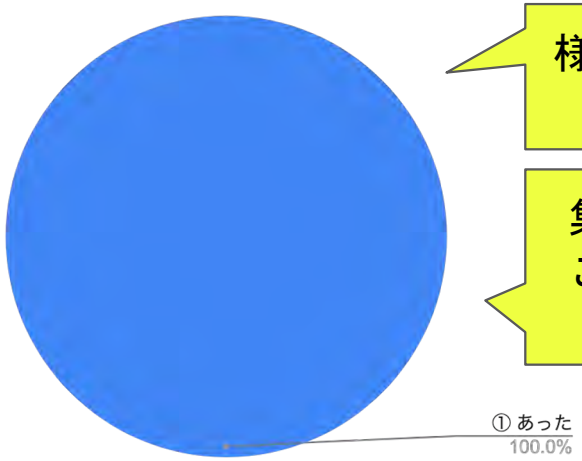




普段は孤軍奮闘・・・
→様々な立場の人との出会い
→様々な見方・意見との出会い

語り合うことで得られること：企画者から

「実践報告」「ディスカッション」を通して何か新しい学びがありましたか。(n=15)



教員からの自分とは違う見方を知ることができて。

学校関係だけではなく、様々なお立場の方と意見交換ができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

様々な日本語支援の場所があることを知れたため

教員以外の方と考えを交流し、学びということの本質に迫れたこと

集住地区と散在地区を比較することで、それぞれのメリット・デメリットに気がつけた。

様々なディスカッションから『つなぐ』というテーマが見えてきました。自分にこれから何ができるのか、考えていきたいと思います。

立場の違いで見え方が違うことを、ディスカッションで言語化することで共通認識とすることができました。

自分とは立場の異なる、教育委員会の方や学校教員の方の話を聞くことができ、様々な実践例を知ることができたから。

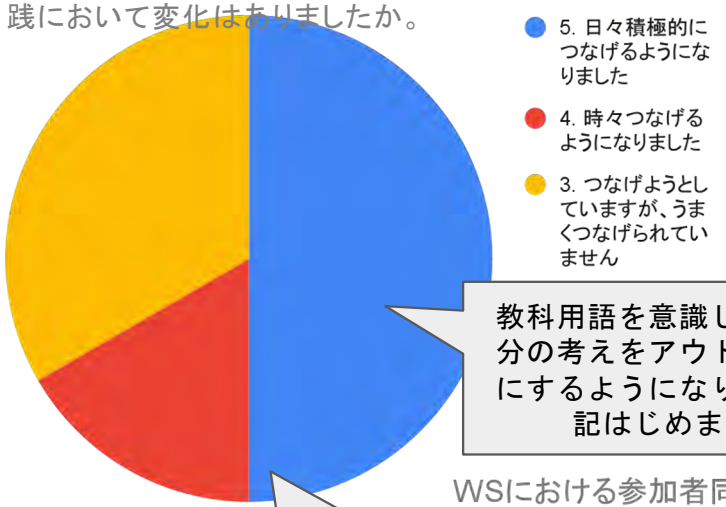
先生方や地域の皆さんの熱意や孤独感を改めて感じました

「繋ぐ、繋げる」ことの大切さを改めて実感し、自分の実践に生かしたいと思います

場自身が横断的で多くの学びを得ました。

WS3ヶ月後のフォローアップ・アンケート (n=6)

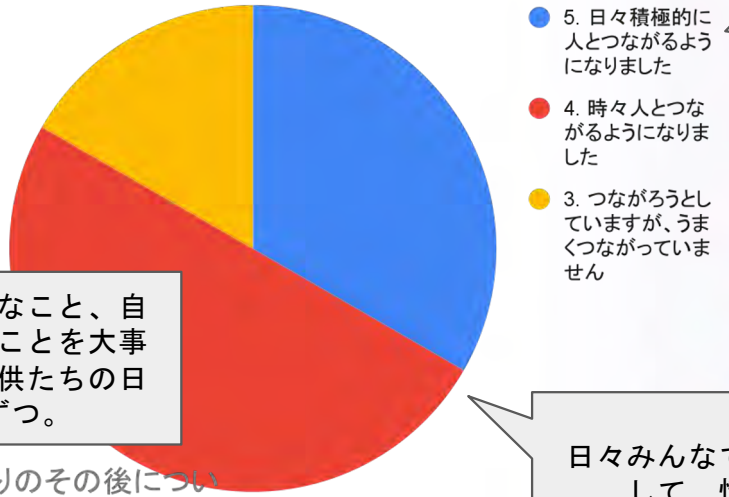
教科間の学習や教科と日本語の学習を横断的につなげるという点において、WS参加後あなたの現場・実践において変化はありましたか。



教科用語を意識して、体験的なこと、自分の考えをアウトプットすることを大事にするようになりました。子供たちの日記はじめました。少しずつ。

普段の生活の中で使う日本語をツール（折り紙）を使って（折る、合わせる、開く、半分、角、三角、四角など）実践的な活動を通じて算数教科につながった

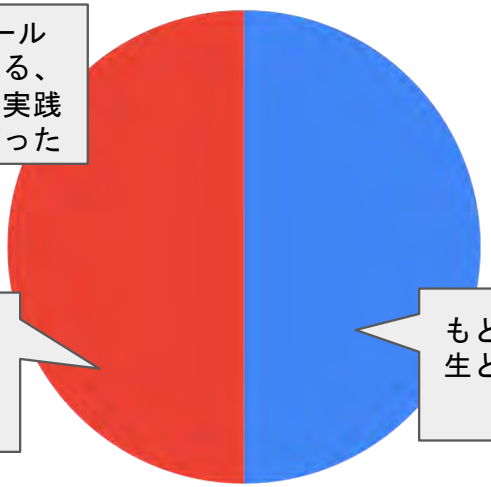
人と人がつながるという点において、WS参加後あなたの現場・実践において変化はありましたか。



学校内でたくさんの関係者がいるため情報交換しています。児童に関わる人がたくさんいて、声かけも多いと思います。

日々みんなで記録を大事にして、情報交換。

WSにおける参加者同士のつながりのその後について教えてください。



LINE交換は大事でした。グループで率直にはなせてよかったです。

もともと知り合いだった参加者の先生と共に、参加者を募って勉強会を開いている。

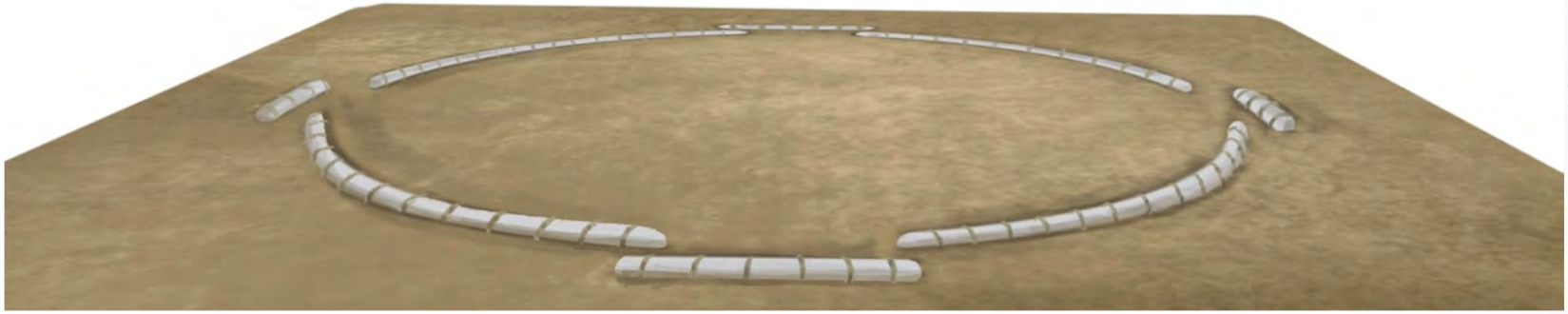
富山市や滑川市の先生方と勉強会を開いたり、県外の先生から情報を得たりしている。

職場で外国人児童の相談、連絡など意見交流、情報交流が多くなっています。みんなで見てるかんじに。まだ地域の協力は得れていないです。

どう語るか

－同じ“土俵”で対話・議論し、学びを深めるために発信者が言語化して伝えるべき情報－

- **実践の背景・目指すところ**
  当該実践がどのような流れの中で行われているか。どのような力の習得を目指しているか。
- **実践の環境（生活・学び）**
  どこで、どのような生活環境・学習環境で行われているか。
- **子どもの情報**
  実践に関わる子どものルーツやことばに関する情報などに過不足なく伝えられているか。
- **実践者の情報**
  どのような人が実践を行っているか（関わっている人々も含め）。
- **伝えたいこと・議論したいこと**
  この実践を通して誰に、何を伝え、どのような議論をしたいか。

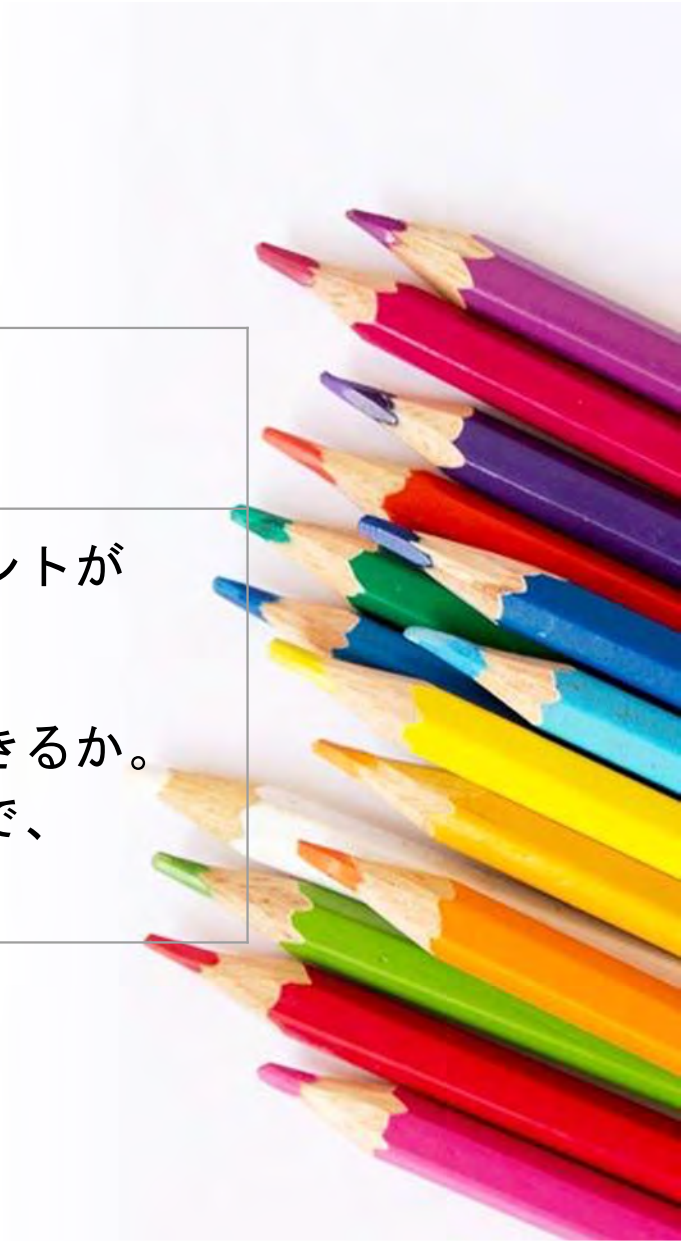


（　村澤）

イラスト出典https://www.ac-illust.com/

どうきく（聴く）か　～受け止める

「自分には関係ない」 「自分の現場は全く違う」	違う立場、違う視点から 話をきき学ぶ。
発表実践 「特有の状況」について注目	実践から見えてくるポイントが 何かを考えながらきく。 どう自分の現場に還元できるか。 自分の現場、自分の立場で、 何ができるか考える。



どうきく（訊く）か　～対話につなげる質問

①事実確認の質問
②**実践者にもっときたいことは？＝参加者全員で議論を深めたいポイントは何か**

★対話につなげる質問をするときのポイント
「立場や背景」「質問の意図」を含め発言する。

→ 子どもの学びの本質にかかわるような大きな問いに。

→ 問いを考えていくことを通して、
「こういうことを考えていきたいんだ」という思考の言語化に。

→ 実践から語り合うことが深まる。

ご清聴ありがとうございました

2025年夏
ワークショップ開催（予定）

「実践を伝える・聴く・語り合う」会を皆さんの地域での主催をご希望する方は、
子どもの日本語教育研究会事務局までご連絡ください。
アドレスは
kodomononihongokyoiku@gmail.com

子どもの日本語教育研究会
研究企画委員会　プロジェクトA

菅原雅枝（愛知教育大学）
青木由香（NPO法人アレッセ高岡）
今澤悌（甲府市立大国小学校）
工藤聖子（東京学芸大学）
髙柳なな枝（地球っ子クラブ2000）
築樋博子（豊橋市教育委員会）
村澤慶昭（武蔵野大学）
横溝亮（横浜市教育委員会）

実践報告

阿部朱理（金沢大学附属小学校）
中川佑紀（金沢大学附属小学校）
深澤のぞみ（金沢子どもスタディサポート）